9/6　創世記4章1-16節「カインとアベル」

小池 宏明 牧師

最初の人アダムとエバは、神様のご命令を破って、罪を犯し、エデンの園から追放され、多くの祝福や特権を失った。しかし、主は、二人に、新しい命の誕生、そして家庭と生活を与えて下さった。

1 節「**人は、その妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「私は、【主】によって一人の男子を得た」と言った。**」2 節前半「**彼女はまた、その弟アベルを産んだ。・・・**」カインとアベルは、どんな大人に成長しただろうか？

＊礼拝の場における罪

2 節後半から 5 節「**アベルは羊を飼う者となり、カインは大地を耕す者となった。しばらく時が過ぎて、カインは大地の実りを【主】へのささげ物として持って来た。アベルもまた、自分の羊の初子の中から、肥えたものを持って来た。【主】はアベルとそのささげ物に目を留められた。しかし、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それでカインは激しく怒り、顔を伏せた。**」二人が主なる神様の御前に出る礼拝の場が、大きな犯罪が起きる出発点になったのだ。主なる神様は、私たちひとり一人の何を見ているのだろうか？

＊不信仰こそ罪

主は、捧げる人の心を見ている。ヘブル人への手紙 11 章 4 節「**信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神に献げ、そのいけにえによって、彼が正しい人であることが証しされました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だと証ししてくださったからです。彼は死にましたが、その信仰によって今もなお語っています。**」この箇所で、はっきりしているのは、礼拝やささげ物において、主は人の信仰を見ているということだ。そして信仰は行いに現れてしまう。アベルは自分の全生活を献身の心で捧げた。カインは、形式的でマンネリ化したお勤めのような心持ちで、主の御前に出たのかもしれない。カインは、神様も隣り人も見ないで自分の殻に閉じこもって、顔を伏せた。

＊主の憐れみと罪の広がり

しかし、主なる神様は、そんなカインに御声を掛けてくださった。主は不信仰なカインに何度も声を掛けておられる。しかし、カインの心は塞ぎ込んだままだった。ついに、8 節「**カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかって殺した。**」それでも主は、カインに悔い改めるように御声をかけて下さった。ところが最後まで、カインには、主なる神様に対する悔い改めの言葉も、弟に対する謝罪の言葉もなかった。これが、神様を無視した、神を抜きにした文明の始まりとなる。

カインは、顔を伏せ、主の御顔を避けて、ついには主の前から出て行った。私たちは、顔を上げて、主の御顔を仰ぎ見て、主の前に近づこう。主と共に歩もう。